



子どもの心の健康講座 ②1

子育ての歴史1

現代の子育ては、子どもを親が家庭の中で責任を持って育てることが前提になっており、発達の問題や様々な精神的な病気、児童虐待などもその考えを前提に語られることが多いでしょう。それでは昔の育児はどうだったのでしょうか。今回は子育ての歴史について少し触れてみます。【参考文献：滝川一廣「子どものための精神医学」医学書院 2017、森山茂樹・中江和恵「日本子ども史」平凡社 20021

育児というものが成り立つには何が必要なのでしょうか？

人間は、時代や社会を超えて共同社会を持っており、その社会の中で人と複雑なやり取りをしながら生きています。そのため、人間の子どもは身体が成長するだけではなく、社会的にも成熟して複雑なやり取りが可能となるような知的な能力を学び、対人関係の力を身に付けなければなりません。子どもはそう言った力を備えた大人との密接な交流を、長い期間積み重ねる必要があるため、大人になるには他の哺乳類の動物よりも多大な手間暇がかかります。これが人間の子育てがたやすいものではない理由となっております。

ですから育児では、大人と子どもの強いつながりの意識

が必要となります。このつながりの意識を生み出す力には、

- ①身体的なつながり感（血が繋がってる）、②社会の中で「親子」と意味付けられ周りからも認識をされること、③子どもから親に「なつく」と、が必要でです。

古代〜明治の子育て

古代の社会では、子どもは大人の生活に密着し、親のやることを見ながら育ちました。子どもたちは親が狩りや食物の採集をし、生活に必要な物作りを手伝い、家族と食事を共にしながら語り合う中で、文字はなくても生きていくのに必要な知恵を教わっていたのでしよう。

江戸時代では、寺子屋や自宅での教育が広まり、識字率が高まり、知恵の伝達が書物

でも可能となっていました。育児の方針は、儒教の教えを主として、子どもは比較的厳しくしつけられていました。生活環境が厳しいため乳幼児の死亡率

率が高くとて、も高く、幼い子ども

の健やかな成長を祈るしかありませんでした。

子どもは必ず育つとは限らず、産業は農業・漁業・林業などの第一次産業が主で、

将来の働き手が必要としたこともあり、親は子どもをたくさん産まねばならなかった反面、子どもが多すぎれば育てきれない矛盾もあり、間引き



や「捨て子」も少なくありませんでした。「捨て子」は禁令があつたものの、「見つけた者は代わりに育てよ」という決め事があつたり、貧しい家の子や親を失つた子を育てる「もらい子」もよくあり、

命を頼む「名付け親」や、子どもをいったんわざと捨て捨つた者に「拾い親」なつてもらうなど、何らかの「つながり」の意識を作る仕組みがありました。乳児が産みの母親ではない女性から「もらい乳」をすることもよくありました。金持ちのご隠居が、家に子どもを集めて、食事や子どもが喜ぶような遊びをたくさん用意して

もてなす「子ども大寄せ」という催しもあつたようです。この頃の

子育てには、地縁血縁的なつながりや身分職業的な

ネットワークによる社会の協同的な営みとしての色彩が強くありました。

明治からは近代化が押し進められ、士農工商の身分制度が消えました。それまでは親

の属する身分職業によって、子どもを大人へ育てるシステムが出来上がっていました。そのシステムが崩れ、子育ては個々の親に委ねられるようになりまし。その分子育ては難しくなりました。近代医学に基づいた乳幼児ケアの啓発と、子育ての指針のため育児書が刊行されるようになりました。1872（明治5）年より学校制度がはじまり、子育てと学校教育がリンクするようになりました。1898（明治31）年に制定された民法によって、家制度（家長に家族扶養の義務を課す）ができあがり、ここから「子どもは親がその家庭で育てるべき」という考えが社会に定着するようになりました。

現代の子育ての基本的な形は、明治期に作られたと考えられます。それは、①子どもは親が育てるという強い意識、②共同社会からの独立性の強まり、③学校教育との密接なリンクであり、この特徴は現代では一層強まっています。良い点もありますが、それが一方で現在の子育てに難しさをもたらしています。

児童精神科医

北 畑 歩